

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 25 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23402023

研究課題名(和文) グローバル化と変貌する南アジアのマイクロファイナンス

研究課題名(英文) Globalization and Microfinance in Changing South Asia

研究代表者

伊東 早苗 (Ito, Sanae)

名古屋大学・国際開発研究科・教授

研究者番号：80334994

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,800,000円、(間接経費) 2,040,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、グローバル化の中で変容しつつある南アジアの農村で、マイクロファイナンスがどのような可能性と課題をもつかを検証することである。研究期間中、ブータン、ネパール、スリランカ、 Bangladesh、インドの農村地帯で調査を実施し、グローバリゼーションの影響がどのように農村に浸透しており、人々の金融サービスに対する需要やアクセスにどう影響を及ぼしているかを把握した。農村から海外への労働移動が顕著であり、それが農村金融に影響を与えていることや、グローバルなIT技術の発展やマイクロファイナンス産業自体のグローバル化が新しいタイプの金融サービスを生む一方、法規制が追いついていない現状を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research is to examine how microfinance is changing in rural areas of South Asia under the forces of globalization. Field research was conducted in rural areas of Bhutan, Nepal, Sri Lanka, Bangladesh and India to understand how the forces of globalization penetrate these areas and how this influences people's access to financial services. It has been found that international labour migration from rural areas of South Asia is becoming increasingly common and that this significantly affects the size and the forms of rural finance. It has also been found that the growth of the global microfinance industry is giving rise to new forms of financial services in some of the countries under study, while posing new challenges especially concerning regulatory frameworks.

研究分野：社会科学B

科研費の分科・細目：応用経済学

キーワード：マイクロファイナンス 南アジア グローバリゼーション

1. 研究開始当初の背景

途上国農村におけるマイクロファイナンスの研究は、1990年以降急激に増えた。特に、南アジア農村における貧困削減とマイクロファイナンスの関係については、膨大な研究の蓄積がある。しかし、途上国農村の貧困問題を解消するためのマイクロファイナンスという概念も、その途上国農村自体が大きく変貌を遂げるに従って、新しい分析の視点が求められるようになった。一方、農村開発の一環として始まったマイクロファイナンス自体も、グローバルな産業として世界的な発達を遂げ、貧困削減という初期の社会的使命が置き去りにされつつある現状もある。

2. 研究の目的

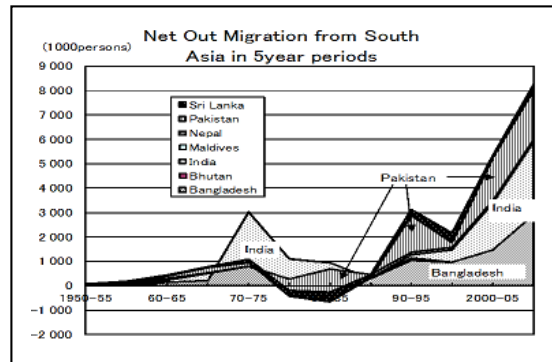
本研究の目的は、グローバル化の中で変容しつつある南アジアの農村で、マイクロファイナンスがどのような可能性と課題をもつかを検証することである。ブータン、ネパール、スリランカ、バングラデシュ、インドの農村地帯で調査を実施し、グローバリゼーションの影響がどのように農村に浸透しており、それが人々の金融サービスに対する需要やアクセスにどう影響を及ぼしているかを考察する。また、グローバル産業として発達したマイクロファイナンスが、南アジア各国においてどのような進展を見せており、変わりゆく農村地帯の金融ニーズにどのように対応しているかを分析する。

3. 研究の方法

南アジアには、マイクロファイナンスの老舗ともいえる組織が多数ある。しかし、その発展経路は国によって異なり、アプローチの仕方や法的枠組みも大きく異なる。本研究では、バングラデシュ、インド、スリランカ、ネパール、ブータンのマイクロファイナンス機関や援助機関を訪問し、近年の政策的動向を調査する。さらに、これらの国々の農村において、グローバリ化がどのような形で貧困層の生活に影響を与えているかを調査し、この変化に対応する新しい形のマイクロファイナンスのサービス内容や提供方法についても農村調査を通じて明らかにする。

4. 研究成果

(1) 本研究を通じ、以下の点を明らかにした。
南アジア(ブータン、ネパール、スリランカ、バングラデシュ、インド)の農村地帯は、グローバリゼーションの影響を強く受けている。何をもちいてグローバリゼーションの影響と特化するかは難しいが、もっとも顕著な現象としては、これらの国々における海外出稼ぎ労働者の増加が挙げられる。本研究においては、ネパール、バングラデシュ、インド、スリランカの農村で、南アジア地域内もしくは中東への海外出稼ぎ労働者が増えており、その結果、海外送金の額も増加していることがわかった。



マイクロファイナンス産業がグローバルな展開を見せる中、南アジア各国政府による政策方針は、概ね同じ方向を向いているといえる。一方で、それぞれの国におけるマイクロファイナンスの発展経路は同じではなく、国による個別の特徴も顕著である。ブータンはマイクロファイナンスの実績において最も遅れているものの、国際的な政策方針をブータン開発銀行を通じてトップダウンで施行しており、ある意味では国際的な流れに最も足並みを揃えているといえる。一方、バングラデシュは最も早くから、現在のマイクロファイナンスの先駆けとなる革新的な試みを次々に生み出してきたが、それゆえにグローバルなマイクロファイナンスの商業化の流れには乗らず、非営利を貫く団体が今も主流を占めている。その一方で、携帯電話を用いた支払いシステム bKash を始めとする、民間セクターの新しい動向が注目される。

インドにおいては SKS マイクロファイナンスという金融会社が 2010 年にボンベイ証券取引所で株式公開を果たし、国際的に注目を集めた。しかし、その直後に債務者の相次ぐ自殺が報道され、社会的な責任が問われる事態に発展した。これを受け、SKS マイクロファイナンスの本拠地であるアンドラプラデシュ州政府はマイクロファイナンス機関への規制を強化し、その余波は現在も続いている。本件はインドにとどまらず、グローバルなレベルで、マイクロファイナンス機関の行き過ぎた商業化に警鐘を鳴らす契機になった。

スリランカにおいては、歴史の古い農村金融の共同組合組織であるサナサと、民間銀行であるサナサ開発銀行とが協力し、農村組織と近代的金融サービスを合体させたサービスを展開している。また、輸出用紅茶産業におけるインデックス保険導入の試み等、新しい動向も見られる。

グローバルな情報技術の発展とともに、様々な情報端末を用いた新しいマイクロファイナンスの技術が、南アジアの農村にも持ち込まれている。山岳地帯に住民が点在するブータンやネパールでも、手のひらサイズの小型パソコンを用いた顧客管理や、モバイルバンキングの兆しが見られる。バングラデシ

ユでは、携帯電話を用いた支払いシステム bKash が都市部を中心に導入されており、今後は農村部でも普及する可能性を秘めている。

これらを総合的に見た場合、南アジアの農村地帯は、海外出稼ぎ労働者の増加や、アグリビジネス等輸出産業への参入機会の増加により、金融サービスへの需要が増大しているといえる。また、金融サービスの種類としては、従来のようなグループ貸付け方式よりは、個人単位の貸付けを好む傾向があり、融資以外にも、送金サービス、各種支払いサービス、穀物保険商品等、マイクロファイナンス商品需要の多様化が見られる。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

南アジア個々の国におけるマイクロファイナンス機関の影響評価については、数々の研究成果がある。しかし、個別の国を超えた南アジア農村部における全体的傾向や、それがグローバル化とどのように連動しているかといった考察は少ない。その原因の一つは、南アジアの国々の多様性に求められるが、南アジア各国からの中東への出稼ぎ労働者の増加が、これらの国々におけるマイクロファイナンスへの需要形成に大きな影響を与えていることは否定できない事実である。また、IT 技術を使ったモバイルバンキングや支払いシステム、インデックス保険の導入等、従来の南アジア農村で提供されていた金融サービスとは大きく異なる革新的なサービス普及の端緒を明らかにしたことも、本研究の成果であるといえる。さらに、南アジア全体における農村人口の大きさを考えると、本地域における貧困削減という社会的使命と、上述した新しい金融サービスの導入とが、どのようなバランスのもとに進展していくかを検討したことは、世界のマイクロファイナンス産業の今後にも示唆を与える。

(3) 今後の展望

本研究において、マイクロファイナンスの社会的使命である貧困対策と、グローバル化による新しい金融需要の進展とが、バランスよく共存するための1つの鍵を握るのは、マイクロファイナンスに関する法的枠組みであることが浮かびあがった。ほとんどの国で、この法規制が金融技術の進展に追いついていないのが現状である。今後は、法的枠組みがどのようにマイクロファイナンスの技術的進展を促進し、また行き過ぎた商業化に歯止めをかけ得るのかを研究する余地がある。

5. 主な研究論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Sanae Ito, "Social business for pro-poor growth", *Forum of International Development Studies*, 43, 2013, pp.17-28. 査読有

須田敏彦「スリランカの海外出稼ぎ労働者：金融の役割に注目して」大東文化大学紀要, 51, 2013, pp.91-107. 査読無

Sanae Ito, "Civic duty for community development", *Journal of International Development*, 23, 2011, pp.868-879. 査読有

須田敏彦「ネパールおよびブータンの経済状況：ヒマラヤ国家のイメージと統計データのギャップを埋める試み」大東文化大紀要, 50, 2012, pp.101-116. 査読無

[学会発表](計 10 件)

Sanae Ito, "Recent trends in microfinance and their implications for South Asia", IISWBM Seminar, IISWBM (Kalkatta), 2013.8.19

Toshihiko Suda, "Increasing overseas workers from South Asia and their impact on the rural economy", IISWBM Seminar, IISWBM (Kalkatta), 2013.8.19

須田敏彦「パキスタン農村経済のダイナミズム」大東イラン研究会 大東文化会館 2013.11.10

須田敏彦「増大する南アジアの出稼ぎ労働者：マイクロファイナンスへの期待」国際開発学会東海支部 名古屋大学大学院国際開発研究科 2012.5.11

Sanae Ito, "Social business for pro-poor growth", International Conference on Food Security, University of Brawijaya, Indonesia, 2012.11.27 (招待講演)

Sanae Ito, "Why does globalization matter to microfinance", International Workshop on Recent Developments in Microfinance, GSID at Nagoya University, 2012.6.22

Toshihiko Suda, "Microfinance and overseas migration", International Workshop on Recent Developments in Microfinance, GSID at Nagoya University, 2012.6.22

Mariko Okamoto, "Has globalization affected the performance of rural savings and credit cooperatives in Nepal?", International Workshop on Recent Developments in Microfinance, GSID at Nagoya University, 2012.6.22

Sanae Ito, 「Civic duty for community development」国際開発学会 名古屋大学 2011.11.26

岡本真理子「低所得者層向けマイクロ保険の確立」国際開発学会 名古屋大学 2011.11.27

[図書](計 3 件)

Toshihiko Suda and M.C.S. Bantilan, "Achievements and challenges of SHG-Bank

Linkage Program in India” in *Microfinance, risk-taking behavior and rural livelihood*. Bhandari and Kundu, eds. Springer, 2014, 25/185p.

伊東早苗 「マイクロファイナンス」『テキスト国際開発論』勝間靖編著 ミネルヴァ書房 2012, pp.13/355p.

岡本真理子 「マイクロファイナンス機関の活動と女性の貧困」『世界の社会福祉年鑑』宇佐見耕一編著 旬報社 2011, 17/500p.

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

()

研究者番号：

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：